

ユキちゃんとのしこしこ幸せ生活

「お兄ちゃん♡すごい声出てるよ。かわいい～♡」

ガチガチに張り詰めた僕のペニスをユキちゃんはおちくちくおちくちくと抜き上げる。
その度に僕は情けない声で喘いでしまう。

「あ♡あっ♡あああ.....♡」

「ほらもっと頑張って耐えないと♡そんなんじゃ小学生に負けちゃうよ？」

竿をしごくたびに揺れるユキちゃんの大きな胸を目が追ってしまう。
くそっ、なんで小学生なのにこんなにおっぱいが大きいんだ...！

「あれ、おちんちんの先からなにか出てきてるよ♡おちんちんくんが負けちゃう♡やだよー♡って泣いちゃってるのかな？」

「ち、違う.....！僕はまだ負けてないぞ.....！」

「ふーん？じゃあこれはどうかなあ？」

ユキちゃんはニヤリと笑うと、親指と人差し指で輪っかを作り上下にしこしこ動かし始めた。

「あっ♡それだめ、だめえ♡」

敏感な亀頭を素早く擦られ頭が真っ白になる。腰ががくがく震えてしまう。

「えへ♡お兄ちゃんったらもうイキそうじゃん♡出したい時はなんて言うんだっけ...？」

「そ、それは...」

ピクピクと痙攣する肉棒を楽しそうにしごき上げるユキちゃんの姿に見惚れてしまう。

何度も何度も射精させられることによって、すっかり彼女の言いなりになってしまった身体は素直に反応してしまっていた。

本当はダメなのに、ユキちゃんに墮とされることに身体だけでなく心も悦んでしまっている。

「お、お願いユキちゃん♡僕の.....」

ああ、なんでこんなことに...。

仕事に追われ疲れ果てた日々を送っていた僕は、とうとう父に相談しました。

父は、親戚のおじさんが海のある田舎町に一軒家を持っていることを思い出し、僕にその家に住んでみることを提案してくれました。

海が見える田舎町に引っ越してきたら、広大な海が広がっていた。

近くに民家は少なく、20mほど隣に一軒あるだけだ。

心地よい潮の香り、木々が茂り四季折々の花々が咲き誇る風景は、都会の激務で傷ついた僕の心を癒していった。

よし、ここで一から頑張るんだ。

そう決心して、新しい生活を始めることにした。

引っ越した日の夕方に届いた荷物の荷ほどきしていると「ピンポン」とチャイムが鳴った。

ドアを開くと妙齢の女性と、背を向けて外を見ている女の子が立っていた。
僕は女性のその美貌に目が釘付けになった。

女性は、大人の魅力溢れる綺麗なお姉さんといった感じだ。
年齢は20代後半くらいだろうか？ ウェーブのかかった艶やかな黒髪ロングヘア、優しげな瞳も魅力的だが何より驚いたのはその巨大な胸だ。シャツを押し上げて窮屈そうな爆乳には思わず目がいってしまう。人の頭くらいの大きさがあるんじゃないか？

僕が女性の大きすぎる胸に目を吸い寄せられていると女性は「あらあら♡」と笑って「こんにちは田中さん♡ちょっと見過ぎですよ？」
「あっ、すみません！」と焦る僕に、女性が優しく笑って言いました。
「ふふっいいんですよ♡隣に住んでいる山本です。若い人が引っ越してくるって噂になってたんですよ。よろしくお願ひしますね♡」
山本さんは笑顔で話してくる。
すごく優しい人みたいだ。よかった。
「今日は娘とあいさつに来たんです。ほら、ユキ。挨拶なさい。」

外を見ていた女の子がこちらに振り向く。
僕は頭を殴られたかのような衝撃を受けた。

可愛らしい顔立ちに、透き通るような白い肌。肩まで伸ばしたさらさらの黒髪。そしてボタンを弾き飛ばしそうなほどの巨乳。
天使が舞い降りたのかと思った。
「はじめまして。山本ユキです。今年で小学5年生になります。よろしくお願ひします。」

ぺこっと挨拶したユキちゃん。
胸が上下し目で追ってしまう。だ、だめだろ小学生だぞ。
しかしめちゃくちゃいい子だな...かわいいし...

「ちゃんとあいさつできて偉いね。僕は田中って言います。よろしくね。」
内心の動揺を隠しつつ、なるべく平静を装って返事をした。

「わたしたちは母娘二人で住んでますので、田中さんにご迷惑をかけることもあるかもしれませんが...」
そういう不安気にいう山本さん。

「大丈夫です。僕で力になれることがあればなんでも仰ってください」
下心がないとはとても言えないが、困っているなら助けてあげたいと思うのは本当だった。
僕がそう答えると、山本さんは安心したように笑った。

「あの...田中さん。」
ユキちゃんがおずおずと手を上げて声をかけてくる。
胸を見ていたことを言われるんじゃないかとドキドキしていると...

「わたし、お兄ちゃんがずっとほしかったんです。田中さんのこと、お兄ちゃんって呼んでもいいですか...？」

上目遣いでこちらを見てくるユキちゃんの可愛らしい顔に思わず目が眩んだ。こんな天使に僕はなんて邪な思いを...！

「うん、もちろんだよ。本当にお兄ちゃんって思って大丈夫だからね。」

「やったあ！よろしくねお兄ちゃん♡」

そう言って抱き着いてくるユキちゃん。豊満な胸がお腹にむぎゅうと押し付けられる。やわらかい感触に頭がクラクラする。

「よ、よろしくねユキちゃん...。」

なんとか冷静に返す僕の横で、ユキちゃんがニヤリと笑ったことに僕は気付けなかった...

その晩、荷ほどきで1日を終えてひとりで本を読んでいた僕のもとに、ユキちゃんが突然訪ねてきた。

ショートパンツにTシャツ一枚で相変わらず美少女すぎる...。目に毒だな...

「こんばんは、お兄ちゃん。お邪魔してもいいですか？」

「あ、ユキちゃん、こんばんは。もちろんいいよ。どうしたの？」

ユキちゃんは、なんだか落ち着かない様子だ。

「実は、お母さんが仕事で遅くなってしまって、ひとりで家にいるのが怖くて.....。お母さんにはお兄ちゃんのとこ行って電話してある。」

泣きそうな顔をしている。こんな可愛い子が夜一人で家にいたら危ないかもしれない。まあ電話もしてるみたいだし、変なことにはならないだろう。

「わかった。じゃお母さんが帰ってくるまでうちにいていいよ。ゲームでもする？」

ユキちゃんは嬉しそうに頷きました。

「じゃあこの部屋でゆっくりしててね。僕は本を読んでるから。」

「わーい、ありがとうお兄ちゃん♡」

そう言うと彼女は僕の膝の上に向かい合わせに座った。

お尻がちょうど僕の棒の上に来る。甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

「えへへ♡ユキここがいい♡」

「な、な、なにやってるのユキちゃん！」

満面の笑みでくっついてくるユキちゃん。かわいい...じゃない！

慌てて身体を離そうとするが、彼女の細い腕が背中に回されて動けなくなる。

なんだこの子、昼間の時と全然違うぞ！？

「ねえ、お兄ちゃん...」

はしゃいでいたユキちゃんが急に止まり、低い声で耳元で囁いてきた。

「な、何...？」

「お昼の時、ユキのおっぱい見てたでしょ...♡」

バレていた。恥ずかしさで顔が熱くなる。

「え！？そ、そんなこと...」

「誤魔化そうとしてもだめ～♡女の子はそういうのわかるんだよ？お兄ちゃんってロリコンだったんだ～♡ショック～♡」

クスクスと笑う彼女に何も言い返せない。

僕はただうつむくしかなかった。

「ごめんなさい.....。」

「そんなにユキのおっぱい見たかったの？」

胸をぽよぽよと揺らしてこちらを見てくる。

近い。かわいい。いい匂い。触りたいと脳内が混乱している。

「ねえ、見たいの？」

「そ...それは.....。」

正直に見たいという欲望が沸々と湧いてくる。

でもそんなこと言えるわけじゃないか...！

「ふっお兄ちゃんかわいい♡いいよ、好きなだけ見ても.....♡」

そう言いながら彼女は抱き着いてきた。爆乳がお腹につぶれる。そのままTシャツの胸元を指で開く。

「ほ～ら、おっぱいだよ～♡」

深すぎる谷間があらわになり、僕は釘付けになる。

すごすぎる。こんなの大人の中でも見たことない...

「す、すごい.....」

ごくりと唾を飲み込む。もう理性なんて吹き飛んでしまいそうだ。

だ、だめだ。落ち着け僕。ユキちゃんは小学生なんだぞ。

いつの間にかズボンの中ではペニスがギンギンに固くなり我慢汁を流していた。

「お兄ちゃんってやっぱり...♡」

彼女が妖艶な笑みを浮かべる。

そして僕の耳に口を近づけて囁いた。

「マゾなんだ.....♡」

その言葉を聞いた瞬間、全身に電気が流れたような衝撃が走った。

「ち、違うよ.....。僕は.....そんなんじゃない.....んぐう!？」

否定しようとするも胸で顔をふさがれてしまう。

甘ったるい匂いに何も考えられなくなる。

「だってこんなにされてるのに全然抵抗しないじゃん♡ロリコンでマゾなんでしょ♡」

なんとか胸から顔を出すと、ユキちゃんが満面の笑みでこちらを見ていた。

か、かわいい...。い、いや違う。否定しないと...

「そ、そんなんじゃない！僕はロリコンでもマゾでもない...あ♡」

ユキちゃんがズボンのふくらみを撫で上げる。

突然の快感に声が漏れてしまう。ぴゅっと先走りが噴き出す。

「なに、あ♡って♡絶対マゾじゃん♡」

「ち、違う...マゾなんかじゃ...あ♡あ♡」

僕のしゃべりを遮るように股間を撫でまわす。勃起して敏感になった裏筋が刺激され何がなんだか分からなくなり、頭の中がピンク色に染められていく。

だ、だめだ。気をしっかり持たないと...相手は小学生なんだぞ...。

「僕はマゾじゃな...」

「もし」

ユキちゃんが遮るようにゆっくりと耳元で囁く。

「素直にロリコンのマゾですって言えたらあ...」

胸がぎゅっと押し付けられる。

あまりの柔らかさに何も考えられなくなる。

「ユキがいっぱいご褒美あげるよ...♡」

ペニスのくびれを握り、一瞬だけくちゅくちゅくちゅと擦り上げる。刹那の強い快感に先走りがどぴゅぴゅと噴き出る。

ユキちゃんはすぐに手を放してこちらをクスクスと笑いながら見ている。

強い快感が一瞬で消えてしまう。

もう我慢の限界だった。